The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懐徳堂に憶う
Author(s)	堀田, 庄三
Citation	懐徳. 1983, 52, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90607
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂に憶う

懐徳堂記念会理事長
堀田庄三

私は、昭和四十五年に前理事長北沢敬二郎氏が急逝された後を受けて懐徳堂記念会の理事長に就任したが、他方、適塾の再建にも関係させていただいた。昭和五十二年に適塾が見事に修復されたのは、日本生命、八木通商さんといった直接関係者の他、大阪大学はじめ関係各位の格別のご尽力によるもので、大阪にとって大変意義ある事であった。その竣工式典の折、私も挨拶に立って「適塾の修復は第一号であり、今後第二号、第三号と進めて、大阪を商工業の地のみならず文化の匂いの漂う土地にしたいと思う」と申し上げた。

このことは大阪府知事・市長・大阪大学総長はじめ、多くの心ある方々が念じておられる事であるし、懐徳堂の建物の再建は適塾と並んで是非とも行われなければならないものであると思う。私も理事長就任以来、阪大の先生方と何度も話し合って実現の途を求めて来たのだが、現状では旧敷地等々に種々の問題があり、未だ再建の緒にもついていないのはまことに残念である。

大阪にはこの種の文化的遺産が少ないからであろうが、「商都」のイメージばかりが強く浮き出してくると言われても、残念ながら肯定せざるを得ないのではなかろうか。それ故にこそ懐徳堂という立派な文化遺産の再建は、是非なし遂げねばならぬことと思うのである。

次に懐徳堂の精神面の継承・発展について考えて見たい。懐徳堂は、江戸の昌平黌が官学として発足したのに対し、あくまで町人の学塾として立派に運営されてきたことが、大阪人の土性骨というか、気骨の一端を示すものとして、大いに誇るべきもので、これら先人の先見性と事蹟については、

阪大を中心とした先生方がこれを顕彰し普及に努めて来られた。

この仕事は大切なことであり、諸先生方に敬意を表するものであるが、ただ、私が理事長就任以来繰り返し申してきたのは、第一に、懐徳堂の人々の気骨は、常にそれから先の時代を展望しており、権力を持たず、国家の援助も受けぬ町人階級が、自分達の将来への夢を掻き立てて、教育に或いは勉学に勤しみ、時代に先駆ける立派な業績を収めてきたと言うことである。

第二に、この教えを今日に伝え、又研究するのは勿論大切な事であるが、これが単に歴史の研究に終ってはならないのである。何よりも肝腎なのは、当時の人々が自ら需め、力を培って、これからの日本を作り上げてゆこうとした進取の精神を、現代に如何に生かしてゆくか、そして現代の人々が自分達の将来をどうするのか、といった前向きの研究に力点を置いてゆかなければならないと考えるのである。

世に古の学者或いは学派の事蹟を伝えようとする試みは多いが、その大半は極く限られた人達のものに止まり、それ以上の生成発展がなく終っているようだ。

「言うは易く行うは難い」のであろうが、古い時代の精神を更めて見直し、この中から新しい時代に即した、或いは時代を先取りする新たな発想を、わかりやすく且つ広く世に訴えて、今後の事業を進めていただきたいのである。

この様な事を機会あるごとに申してきたのであるが、本年に入り阪大の山村総長をはじめ、多くの方々の発意により、懐徳堂精神の一層の展開を志向した「懐徳堂・友の会」が組織され、日本生命の弘世さんが快く会長を引き受けてくださった。また財界、学界を問わず多数の方々に会員に加わっていただいた。記念会理事長としては大変喜ばしい事であるが、省みれば、懐徳堂の事業はまだまだごく限られた範囲にとどまっているのである。

従来から懐徳堂に関係して来られた先生方、旧堂友会会員の方々には、更めて懐徳堂精神の普及発展にご尽力願いたく、また新たに協力をお願いした財界はじめ、友の会会員各位には、是非とも懐徳堂の精神をご理解願い、この企てに共鳴されて、次の世代へのまたとない贈物をしていただきたいと考えるのである。